

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	24-013	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Perceived Risk of Binge Drinking among Older Alcohol Users: Associations with Alcohol Use Frequency, Binge Drinking, Alcohol Use Disorder, and Alcohol Treatment Use 飲酒する高齢者は短時間の間の多量飲酒 (binge drinking) のリスクを認識しているか：飲酒頻度、binge drinking、アルコール使用障害、アルコール依存の治療との関連性		
執筆者		
Choi NG, Marti CN, Choi BY.		
掲載誌		
Int J Environ Res Public Health. 2024 Aug 16;21:1081. doi: 10.3390/ijerph21081081.		
キーワード		PMID
短時間の間の多量飲酒 (binge drinking)、飲酒のリスクの認識、アルコール使用障害 (AUD)、アルコール依存の治療		39200690
要旨		
背景： 高齢者では飲酒者や短時間の間の多量飲酒 (binge drinking) 者の割合が多い。しかし、高齢者の飲酒のリスクの認識と飲酒パターンとの関連性についての研究はほとんど行われていない。		
方法： 2022 年全国薬物使用・健康調査の参加者で、50 歳以上で過去 1 年間に飲酒していた群 (N = 6693) のデータを使用した。(1) 週 1~2 回 binge drinking を行うことに対するリスク認識と飲酒頻度、binge drinking の頻度、アルコール使用障害との関連性、および (2) アルコール治療 (アルコール依存の治療) を行ったか否かとそのリスク認識との関連性を解析した。		
結果： 過去 1 年間に飲酒していた群の約 40% が週 1~2 回の binge drinking はリスクが大きいことを認識していた。また、過去 1 年間に飲酒した群の 27% が過去 1 か月の間に binge drinking をしていた。リスクが大きいことを認識している群で飲酒頻度 (毎日飲酒群の IRR = 0.60、95%CI = 0.48-0.74) と過去 1 か月の間の binge drinking の頻度 (binge drinking を 6~19 日行った群の IRR = 0.33、95%CI = 0.19-0.57) に負の相関関係があることが多変量解析で明らかになった。軽度のアルコール使用障害の群では、リスクが大きいことの認識のオッズ比が低かった。リスク認識はアルコール治療の有無とは有意な関連がなかった。		
結論： binge drinking のリスクが大きいことを認識しているオッズ比は、問題を孕んだ飲酒行動を行う群で低かった。アルコール治療を行っているオッズ比も、問題を孕んだ飲酒行動を行う群で低く危機感が抱かれる。飲酒の害を減らすためには教育や介入が必要である。		